

序文

第3回国際学術会議 「漫画の社会性—経済主義を越えて」後記 —漫画研究の多様性とその発展に期待して

パク・ソクファン（朴錫煥）

梁仁實 訳

1. 開催の背景—京都からの意味ある提案

京都精華大学国際マンガ研究センター（以下、imrc）主催による第3回国際学術会議が2011年9月14日～15日、韓国の漫画都市・富川（ブチョン）で開催された。富川にある富川大学と韓国漫画映像振興院（以下、KOMACON）などで開かれた今回の国際学術会議はimrcの提案とKOMACONの賛同により進められた。

今までimrcとKOMACONはそれぞれの国の漫画を収集・保存し、一般向けの展示と閲覧ができるようにする一方で、漫画を研究するという共通認識の下、交流を続けてきた。

KOMACONはimrcからの提案が両国の漫画研究者同士の交流と協力、そして成長と発展において重要な契機になると考え、これを快く受け入れた。imrcのジャクリーヌ・ベルント（ドイツ、京都精華大学教授）とKOMACONのハン・チャンワン（韓昌完、韓国、世宗大学教授）は韓国で行われた事前打ち合わせのなかで各国の研究者たちの主な関心事と両機関の学術的要請事項に関して話し合い、それに基づいて、学術会議のテーマを「漫画の社会性—経済主義を越えて」にした。

imrcは日本側の研究者たちを厳選し、漫画が消費社会に与える影響力について重点的に分析するとともに、このような環境のなかで美術館や博物館の役割とは何かについて論じることにした。KOMACONは、漫画研究の分野で韓国を代表する大学と研究者たちによる韓国漫画界の歴史と最

近のデジタル化の重点的な分析と、美術館や博物館が進むべき方向性について論じることにした。

今回の学術会議では日本と韓国をはじめとして、アメリカ、ドイツ、ベルギーなど7カ国の漫画研究者16人がテーマ発表をし、延べ300名余りの関係者たちが関わった。

2. 若手研究者のセミナー、研究者同士の交流拡大

1日目の学術会議は富川大学イェジ館6階の合同講義室で開かれた。学術会議に参加した研究者同士の顔合わせを兼ねたこの場では、若手研究者5人がそれぞれ現在行っている研究テーマについて発表した。

最初に発表したイ・スンジン（李承珍、韓国、世宗大学漫画アニメーション産業研究所前任研究員）はweb漫画の双方向性を発展させるための方法について報告した。現在、韓国では漫画制作と流通の環境が急激にデジタル化し、これにより、制作者の人口増加と、ユーザーの評価が速いスピードで高まってくる。イ・スンジンはこれを「web漫画の双方向的モデル」として示すことによって論考した。

顔暁暉（ガン・ショウフィ、マレーシア、京都精華大学マンガ学部非常勤講師）は「マレーシア・マンガにおける混淆性」について発表した。この発表では中国系マレーシア人であり、カオルという名で活動をしている漫画家の履歴と作品傾向を紹介しつつ、漫画が異文化間交流と相互理解などに果たしうる役割を明らかにした。

イム・ヘジョン（任蕙貞、韓国、京都精華大学マンガ専攻博士後期課程）は「韓日新聞劇画の比較論」というテーマで、コ・ウヨン（高羽榮）の『林巨正』と小池一雄／小島剛夕の『忘八武士道』を比較分析した。ユーモア、ナレーション、アクションと性描写、という4つの項目にわたった丁寧な比較を通じて、韓国と日本の政治的・社会的背景が作品の表現レベルと関係がいかにあるかを明らかにした。

キム・ドンボムは（金東範、韓国、富川大学デジタル漫画映像科教授）は「地域社会と地域作家の理想的協力関係」について発表、また、ペク・ジョンフン（白鍾勳、韓国、カトリック大学文化政策研究所首席研究員）は「漫画を活用した政策による文化都市の構築」をテーマにし、漫画都市を標榜している富川市の多様な政策事例を紹介し、理想的な漫画都市構築

のための課題について提言した。

中間報告会という性格をもつこのセミナーには imrc と KOMACON の関係者及び漫画関連研究者 100 名余りが参加し、各研究の方向性と問題提起について有意義な議論を展開し、反論やコメントをするなど熱心な意見交換を行った。

3. キーノート・スピーチと懇親会 — 漫画研究の多様性についての議論

4 時間に及んだ若手研究者たちのセミナーに続いて、富川大学ミレニウム館 13 階のイベントホールで学術会議の開会式が開かれた。開会式は坪内成晃・京都精華大学学長の開会挨拶から始まり、ハン・バンギョ（韓方教、富川大学総長）、吉村和真（京都精華大学国際マンガ研究センター長）、キム・ビョンホン（金炳掀、韓国漫画映像振興院長）の祝辞に続いて、今回の学術会議開催企画主担当のジャクリーヌ・ベルント教授とハン・チャンワン教授のキーノート・スピーチが行われた。

ジャクリーヌ・ベルント教授は京都精華大学が進めている「学術的マンガ研究」の概念と、今回の学術会議開催の趣旨、個別報告の構成などについて紹介した。オタクや腐女子に代表される漫画消費の性向に対する分析だけでなく、日本における地震と災害に対する恐怖が漫画にどのように表れているかなどをも明らかにすることは漫画研究の課題であり、漫画の社会性と繋がると論じた。

ハン・チャンワン教授は「デジタル漫画の融合化がもつ漫画ジャンルの社会文化的可能性」について発表した。デジタル化と価値融合を通じて韓国漫画界のオルタナティブなジャンルとして浮上したウェブトゥーンと学習漫画を中心に据えながら、新たな研究テーマとそれに相応しい研究方法を設定すべきと強調した。

キーノート・スピーチを拝聴した漫画研究者は富川大学総長のおかげで可能になった懇親会で各々の研究テーマと方向性について議論しながら、充実した時間を過ごすことができた。

4. メイン・シンポジウム — 漫画研究に対する深みのあるアプローチ

会議の2日目は韓国漫画博物館1階のデジタル上映ホールにて開かれた。ハン・チャンワン教授と猪俣紀子（日本、京都精華大学国際マンガ研究センター [imrc]）の司会で行われた学術会議では、漫画関連研究者と各マスコミの記者などを含め、200人余りが参加した。

吉村和真（日本、京都精華大学マンガ学部准教授）は「はだしのゲン」を事例に、「マンガから学び得るもの」について発表した。ヒロシマへの原子爆弾投下を素材にしているこの作品は1000万部を超える売り上げを誇る世界的ベストセラーであるが、このような作品が存在しながらも東日本大震災による福島第一原発事故を放置した日本の危機管理意識を批判しつつ、こうした逆説的關係から漫画の社会的機能性を探究すべきであると主張した。

パク・インハ（朴仁河、韓国、清江大学教授）は韓国社会における学習漫画ブームを事例に、「学習漫画からび得るもの」について発表した。知識情報伝達型漫画の学習効果は反復学習による単純暗記に過ぎないと強調し、「遊び」の要素が強い一般的なストーリー漫画を通して学習効果を得られる方法を探すべきという意見を述べた。

イ・キョンレ（李璟來、韓国、慶・大学教授）は「韓国カートゥーンの現状と新たなカートゥーンの模索」について発表した。カートゥーンは漫画の基本であるという側面を出発点に、大学の漫画教育と漫画公募展の多様化、そして漫画フェスティバルの盛況により、一時は活性化されていたものの、現在は非常に委縮していることを指摘した上、デジタル方式による新たなカートゥーンについて議論すべきであると主張した。

ジェシカ・バウエンス＝杉本（Jessica Bauwens-Sugimoto、ベルギー、京都精華大学国際マンガ研究センター研究員 [imrc]）は「社会批評との関係からみたグローバルな『腐女子』漫画文化の可能性と限界」また、5番目の発表者であったパトリック W. ガルバレス（Patrick W. Galbraith、米国、デューク大学）は「『純粋なファンタジーの力』——腐女子の間の遊びと親密性」について発表した。今回の学術会議のなかでもっとも興味深かったテーマである「腐女子」とは、女性漫画家が描いた男性同性愛を好んで

受け入れる女性読者を指す言葉である。バウンス＝杉本は腐女子が日本独特の現象ではなく、世界中の漫画ファンに現れている現象であることを明らかにし、ガルバレスは自分の腐女子研究事例を提示しながら、腐女子研究の多様なテーマの開拓とその可能性についての問題提起を行った。

伊藤遊（日本、京都精華大学国際マンガ研究センター研究員 [imrc]）、山中千恵（日本、仁愛大学専任講師）とハン・サンジョン（韓尙整、韓国、韓国藝術総合学校講師）はそれぞれ「漫画／ミュージアムとは何か」、「誰のための漫画・ミュージアム?」、「韓国漫画博物館の未来のために何を準備すべきか」というテーマで、漫画ミュージアムの資料収集と保存、閲覧と教育のサービスなどに対する事例について発表し、フロアーの参加者との間で書誌情報学と図書館学といったアプローチから多様な質疑応答を行った。

最後の発表者として予定されていた陳仲偉（チェン・チュンウェイ、台湾、逢甲大学客員教授）は、台湾における漫画の歴史と現状を中心に、漫画が政治、社会と産業に及ぼす影響について論じた。

5. 開催の成果 — 研究テーマ設定の多様性への貢献

第3回国際学術会議は、7カ国の漫画研究者16人のテーマ発表を通じて日韓漫画研究のために新たなきっかけを作った。日本と韓国は近現代の漫画史を共有しながら、漫画の世界的な生産国・消費国へと成長してきたが、漫画に対する研究は史的研究やメディア論を除いて未だ成果を上げていない。その理由の一つとしては、漫画に対する日本と韓国の興味が産業的コンテクストに集中していたことが取り上げられるだろう。しかし、今回の学術会議では、漫画に対する経済主義的立場から離れ、社会的意味を探ってみた。そして、16人の研究者は漫画とつながる社会的意味を各々のまなざしを通して見出したのである。デジタル化されつつある社会、異文化交流、政治的環境と表現のレベル、地域社会と文化政策、災害と危機管理、女性読者のサブカルチャー、ミュージアムの社会文化的機能などの研究により漫画研究の多様性を実践的に示すことに成功した。これは今回学術会議のもっとも大きい成果ともいえるだろう。

このような成果を上げることができたのは、日本と韓国以外のほかの国々の研究者が参加したことも大きく影響したと考えられる。日本と韓国

の研究者が既存の漫画研究の枠組から大きく離れることができなかったのに対し、他国の研究者はとても斬新な研究テーマを示してくれた。このような研究テーマの多様性は、これからの漫画研究のテーマ設定とその展開にも重要になると考えられる。